

「疱瘡は見目定め、麻疹は命定め」という諺がある。疱瘡は天然痘では膿疱の跡があばたとなって残ることがあるため、その軽重で容姿の美醜が決まる、かたや麻疹の軽重は命を左右するという意味である。

麻疹は、江戸時代にはおおよそ10数年から20数年の間隔で流行し、計14回流行



湊河口より館鼻方面を望む＝大正末期・青森県所蔵県史編さん資料

したことが確認できるといふ。その中でも1862

(文久2)年の夏、麻疹は日本各地で大流行した。

現在の青森県南部地方も大流行の例外ではなかった。

八戸城下では、熊野屋莊五郎の二男が野辺地(野辺地町)に赴いた際に感染し、

その後妻へ、さらに縁者へと広がったのが流行の発端

だったと、城下商人大岡長兵衛は記している(「多志南美草」)。そして、6月末

から流行が始まり、8月初めごろには大流行に至った

という(「年希集」)。

7月19日、八戸藩は、老

中以下全ての家臣、奥女中や職人棟梁といった給与を

与えている者たち、さらに町人や百姓に対して合計

2,722枚の「御守札」を配布することを決定した

(「旧八戸市史」)。医療知識の乏しい当時において、

感染を防ぐ手立ては神頼みしかなかった。

さて、野辺地同様、海運によって全国と繋がる湊町として多くの人々が行き交

う八戸湊(鮫・湊・白銀の総称)では他国出身の船乗りの間にも感染が広がっていた。閏8月10日、大坂神明丸の水主(乗組員)で

「能州羽久井郡滝村」(石川県羽咋市)出身の「五

三郎」(21歳)が、同じく水主で「宮古藤原」(岩手

県宮古市)出身の平吉(29歳)も7月に煩った麻疹の

ため、10月5日に死亡した。船頭や村役人からの願いに

う八戸湊(鮫・湊・白銀の総称)では他国出身の船乗りの間にも感染が広がっていた。閏8月10日、大坂神明丸の水主(乗組員)で

江戸の流行り病

文久2年の麻疹騒動

相馬 英生

(弘前大学 国史研究会会員)

より、二人は白銀村の福昌寺へ埋葬された(「八戸廻御代官御用留」以下「御用留」)。

また、この地の遊女たちも麻疹のため多くが亡くなっている(「多志南美草」)。遊女は八戸城下最大の法霊祭礼で踊や芝居を披露し、祭りを盛り上げる存在でもあったが、麻疹の流行を理由に法霊祭礼への参加を免除してほしいとの願

いが、彼女たちの属する鮫と湊の船小宿から出されている(「御用留」7月15日条)。

さらに、三戸(三戸町)の給人石井久左衛門が記した「万日記」からは、町場での感染の様子を窺い知ることができ

「町中では麻疹による死人が夥しく、毎日5、6人が亡くなっている。盆前より死人が出て1日たりとも

死人の無い日がない。前代未聞である」(8月14日条)。

「この辺の医者たちは麻疹治療の経験がないのだろうか。医

者が診た者ほど亡くなっている。そのため、医者を恨まないものがない(中略)」。5、60歳になる者

でも以前麻疹に罹ったものは多いが、これほど流行したことはなく、この度の麻疹は老人も記憶がないほど重く罹る」。

周知のように、麻疹は一度かかれば二度と罹らない。つまり免疫ができた人の数が多い間は流行しない。

「文久2年の麻疹騒動」で命を落とした者の多くは、免疫のない子どもや若者、妊婦が中心であったと考えられる。また、当時の医者が麻疹の患者を診察することとは生涯に一、二度であり、治療経験に乏しかったため、治療が難しかったのである。

さらに、麻疹の大流行は人的な被害にとどまらず、経済的な混乱も引き起こしていた。八戸城下では、買

い占めが起きたため「丸行灯、蠟燭、漉き返し紙、菓品の類、焼き麩、豆腐、菓子の類」が品切れとなり、

秋田からもたらされる有様だった(「年希集」)。

また、三戸では、米が格別の豊作だったにも関わらず、稲刈りの担い手が不足し米が市場に出ず、さらに新酒の仕込みと重なり、酒屋が買い占めるため、米の値段が高騰していた(「万日記」閏8月8日条)。

現在の日本は、世界的に見て麻疹対策で遅れているとされる。「文久2年の麻疹騒動」から学ぶべきことは多い、そう感じざるをえない。